

みやけの風

第 218 号

平成17年(2005年)4月9日(土)発行
 発行：三宅島災害・東京ボランティア支援センター
 発行責任者：上原 泰男
 東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ 10階
 東京ボランティア・市民活動センター 気付
 TEL：03-3260-7573 FAX：03-5229-1646
 E-mail：tokyocenter@cmpo.org

今、三宅島では、多くの子どもたちの姿が見受けられます。来週の4月12日に迫った三宅小学校・中学校の三宅島での開校に合わせ、多くの子どもたちが三宅島に帰島しているからです。4月6日には三宅高校が開校し、4月8日には三宅小学校・中学校で学校説明会が開催されました。帰島した子どもたちの中には、支援センターの車を見かけ、「支援センターの車だ！」と声をかけてくれる子どもたちもいます。子どもたちが島に戻って来ることによって、少しでも明るい雰囲気三宅島に戻ることを願っています。

みんなの声

こんな嬉しいことがあったんですよ

3月2日に植えていただいたジャガイモの芽が、10日経っても20日経っても芽を出しません。ハンの木も、あじさいも芽吹き、木苺は日増しに花数を増しているし、ウグイスもメジロもホウジロもアカコッコもキジもまだまだ沢山の鳥たちのさえずりは、一日中聞こえてくるのに、どうしたのかな???

不安がつるばかりでした。

ところが、3月24日、やっとジャガイモが一本芽を出したのです。

「姉さんに知らせなくては」と電話をしても通じません。数日後、姉さんのご主人に出会い、ジャガイモの芽が出たことを伝え、一緒に畑に行き、ジャガイモの芽を数えると9本に増えていました。

「お姉さんにジャガイモが芽を出したって伝えてね」というと、「わかった」と言ってくれました。

そして、4月1日上京し、東京での用事を済ませ、4月8日朝、娘と孫と一緒に帰ってきました。娘にボランティアさんたちに畑のカヤ

を取っていただいたこと、そこへジャガイモを植え、そのジャガイモが芽を出したことを話しながら畑を見ると、わずか一週間でジャガイモ畑一杯に芽を出し、しっかり育っていました。

「あれ、畑の様子がおかしいよ」といって、畑に近づいて驚きました。ジャガイモ畑の手入れがしてあったのです。

「わー、すごい。誰がやったんだろう」

「姉さんに決まっているよ」と皆で大喜び、早過ぎないように時間を待ち、早速電話をしました。

「ジャガイモの畑の手入れ、ありがとう」というと、「カヤの芽が出ないうち残った根を取っておいたから」とのこと。そして、「もう1回追肥をしたり、芽を整えたり、柵を切り上げたりして、ジャガイモが育ちやすくしてやるから心配するな」とのことでした。

それにしてもなんと優しいことか、嬉しくて胸が熱くなりました。

何時も人の優しさの中で暮らせることの幸せを感じています。

(阿古 鈴木 則子)

三宅島ボランティア支援センター三宅島事務所より

島内での活動を続けて2ヶ月半。これまで240件を超える依頼を受けて帰島支援のお手伝いをさせていただきました。活動に参加して下さったボランティアさんの数も330名を超えています。島民の方々とふれあった多くのボランティアさんは「三宅島に友だちができた!」「今度は家族と観光に来るよ!」と言ってくださっています。ボランティアに参加して下さった方が島の観光復興に少しでも力になっていただければと思います。

(2/2)

三宅島帰島支援ボランティア活動報告

【その】

活動日：4月4日(月)

活動地区：阿古地区

<活動内容> 除灰作業 / かや刈り

<感想・等>

- ・本日が初日の新しいニーズに対して活動しました。予定では、カヤ刈りと除灰で、カヤ刈りが中心ということであったが、島民の方との相談の結果、雨水の流路の確保のための除灰を優先する事となりました。
- ・ボランティアは二手に分かれて流路確保をおこなうこととなりました。合計7名での活動でしたが、思った以上に降灰の厚さがあり(20cm以上あるところも!)、作業のやりにくい狭い場所もあったため、結局すべては終わらず、後日改めて作業することになりました。それでも、縁の下に灰が入り込むことはないと思われるレベルまでは作業を進めることができました。
- ・朝の段階でお邪魔した時、奥様が対応に出てきて「まあ、こんなにたくさんの人に来ていただいてありがたい...」「自分で少し作業してみたんですけど、腰が痛くなってしまった」と言っておられました。あれだけの灰を一人で、それも高齢の島民の方が除灰するのではいつまでたっても終わる事はないと思いました。体調が良くないこともあり、あまり長い時間をとって島民の方とお話することはできませんでしたが、人とのふれあいは、まず向かい合って話すことから始まることを改めて実感しました。
- ・また、三宅は復興しつつあることをもっと実感できるようになってもらいたい。作業の休憩中に中学生3人組を見かけることができた。高齢者だけの帰島ではない事を垣間見た気がしました。

【その】

活動日：4月6日(水)

活動地区：神着地区

<活動内容> 除灰

<感想・等>

- ・神着地区のお宅にて除灰作業。庭の周りに灰が3センチほど溜まっていた。屋根から落とした灰も含まれるとのこと。お宅は屋内工事関係の仕事をしており、今は一番忙しく荷物を片付ける時間が無いと仰っていた。
- ・今日の作業は単純だ。灰を除けこのやろうということだ。「よーしやってやろうじゃないか、このやろう。」しかし、気合がもったのは最初の30分。その後はとところどころ手を抜きながら作業を行った。
- ・作業を始めて1時間半経った11時ごろ、腰が痛くなる。灰も積もれば重くなる...これが事実。しかし、島民にとってはこの重みは僕を感じる以上の重さとなっているはず。そう思い込んで作業を続けた。このいろんな意味で、重さを増した灰を除去する事は、自分のような軟弱な人間にはつらかった。もっと、超人のように強くならなくてはと思った。
- ・昼前、「重い。トンずらこきたい。」と思っていたらご主人が冷えたミネラルウォーターを出してくれた。天の恵み。日向にぼてっとほったらかしてぬるみきってしまった水ではない。ガンガンに冷えていて氷入りの、「頭が痛くなるので一気飲み禁止」って感じの水である。ありがたく、かつ、これでもかというくらい飲んだ。
- ・午後も引き続き除灰をやった。午前中と同じことを考えながら作業した。3時前、除灰が終わり、掃き掃除をして作業終了。取り除いた灰は土嚢袋約350袋分程であった。ご主人からありがとうという言葉を受けた。この言葉がうれしかった。今、僕がやっているのは島民のための仕事だ。自分のためではない。島民に喜んでもらいたい、いや、喜んでもらうようなことをしないと意味が無い。こうなったら一ネタ披露してでも笑かせたい。なんか違うような気もするが見事笑わせたものなら御の字だ。
(この感想は僕の個人的感想で、班の総意ではないです。)